



死刑から一転無期刑へ



Y・堀

「ユニテ」の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。私の裁判は原審が死刑判決、控訴審で無期刑に減軽された訳ですが、その判決に対して様々な意見があるようです。

正直なところ、当日はとても複雑な心境であったことも事実で、ましてや御遺族の方々のお言葉を耳にしてから

「一体何が正しいことなのか——」

旨が「サツパリ」判らなくなり、ただただ日々茫然と過ごしておりました。

今回の判決に対し、検察が上告をして来た訳ですが、私の控訴審判決に、弁護人方によれば

「覆る可能性は極めて少ない——」

と話して下さいました。

しかし御遺族の方々のお気持ちを考えますと非常に辛く、やはり複雑な心境になってしまいます。

私の家族や弁護士を含めた周りの方々が、今回の判決を喜ぶことは悪いことではないと思いますが、正直私としては

「控訴が棄却された方が気持ちが楽だった——」

との思いが強く、事実私は

「控訴は棄却されるもの——」

と思っていましたので、未だ私自身の気持ちの整理がつきません。

原審で「死刑判決」を受けて控訴審に入った訳ですから、心境としては「ドン底」だった訳で、どんな結果になろうと

「それ以下は無いだろう——」

と思っていたのです。

しかし自分が生かされて、御遺族の方々が苦しむという現実を生きている現在、以前よりも非常に重く、辛い心境で過ごすことになってしまいました。

実際問題として

「ドン底がドン底ではなくなってしまう——」

という現実、とてもとても今が苦しいです。

死刑囚当事者の方々から見れば、私が感じていることや、それを今こうして文章にしていることは気に障ることもかも知れませんが、しかし私は本当に苦しいのです。

ただ一方で私はこんなことを思っており、つまり

「そもそも何のための裁判なのか、誰のための裁判なのか——」

ということですが。

自分で犯した罪ですので、本来このような表現はすべきでないことは充分承知しており、そして御遺族の方々には非常に失礼極まりないことではありますが、世間の方々の感覚が

「若干ズレているのではないのか——」

ということを私は今回感じました。

友人からのお手紙を拝読致しまして

「一つの事件が起きたら、そこに何らかの形で関わりのあった全ての人が、重い課題に向き合って生きていかなければいけないと思うのです云々——」

という言葉に私は共感を抱きました。
つまり大事なことは

「被害者の方の犠牲を無駄にしてはいけない——」

ということを私自身、苦しみの中から学びましたし、そしてその事は事件に関った全ての人に課せられた責務だと思うのです。

当然、加害者を処罰することは必要なのだと思いますが、でも本当に大切なのは一つひとつの事件を広く浅くではなく

「広く深く深く世間の方々に知って頂く——」

ことこそが求められ、共有していくべき課題であって、裁判員制度が始った今だからこそ、そう考え、捉えていくべきではないのでしょうか。

一つの事件で、加害者を罰して終りにするのではなく、それぞれの事情や社会的状況、背景を掘り下げていくことこそが大事で「死刑問題」についても結局は同じことだと思うのです。

それが世の中を

「良い方向へ向かわせる第一歩——」

と思うのですが、現実的にはともすれば、加害者憎しの感情論ばかり先行し、肝心の議論が置き去りにされており、非常に不幸で悲しいですね。

事実私のように御遺族の言葉が頭から離れず、真から反省し、苦しんでいるものもおそらくそう考えてくると一つの事件を感情論だけで重罰にし、終結にしてしまう、そういう社会は

「とても危険である——」

と思えてならないのです。

私自身、仮にも一度は「死刑判決」を受けて、死刑という究極の刑罰と向き合ったことは、私にとっては非常に重い課題をつき突けられたと同時に、とても考えさせられ有益なことになりました。

そう考えてくると、死刑という刑罰が

「一体どういうものなのか——」

ということ、欲を言えば、広く深く世間の方々に理解して頂きたいと思いますが、反面仮に細く、狭くてもいいので、一人でも多くの人に深く心より、本当に理解して頂きたいと考えております。

そう思うにつれ、友人に言われた

「一つの事件が起きたら、それに関った全ての人が重い課題と向き合って生きていく——」

という言葉は本当に重いですし、私がこれからどういう形で生き、また生かされていくとも「一生の課題」です。

そうした意味において、今後の私は広く深く考えていく重要性、そのためにはまず第一歩として、生かされた私の命で、私の周りの方々に、死刑というものについて深く理解して頂く

と考えております。
 勿論、そのために私自身、今後も「ユニテ」や仲間の皆さんとの交通が許される限りは交流していきたいと思っておりますし、「死刑」という問題に、皆様と共に考えていこうと思っておりますので、今後共よろしくお願い致します。
 そして、どうか皆様も、お体を大切になさってお過ごし下さいませ——。



エッセイ



『今、いのちがあなたを生きている』

名古屋拘 兼岩 幸男

東本願寺の東側の壁に掲げてあることです。

初めは意味がわからなかったけれど、何度も見えて考えているうちに、今私が生きているのは、私が自分で生きているのは、私が自分で生まれて自分で生きているのではなく、いのちを親から貰って、たくさんの人に囲まれ、助けられながら生きているのだという事に気付かされました。

すなわち、自分の命は自分だけの者ではない、というより、親が与えてくれたもの、自分のものではないのだからこそ、「大事にしなければならぬ——」ということ語っているのだと思いました。



[次のページへ](#)

[目次へ戻る](#)

[ブログの表紙へ](#)